

# 祭の晩

宮沢賢治

青空文庫



山の神の秋の祭りの晩でした。

亮二はあたらしい水色のしごきをしめて、それに十五銭もらって、お旅屋にでかけました。<sup>りようじ</sup>「空気獣」という見世物が大繁盛でした。

それは、髪を長くして、だぶだぶのずぼんをはいたあばたな男が、小屋の幕の前に立って、「さあ、みんな、入れ入れ」と大威張りでどなっているのです。亮二が思わず看板の近くまで行きましたら、いきなりその男が、

「おい、あんこ、早く入れ。銭は戻りでいいから」と亮二に叫びました。亮二は思わず、つつと木戸口を入ってしまいました。すると小屋の中には、高木の甲助だの、だいぶ知っている人たちが、みんなおかしいようなまじめなような顔をして、まん中の台の上を見ているのです。台の上に空気獣がねばりついていたので。それは大きな平べったいふらふらした白いもので、どこが頭だか口だかわからず、口上言いがこつち側から棒でつつかと、そこは引つこんで向うがふくれ、向うをつつとこつちがふくれ、まん中を突くとまわりが一たいふくれしました。亮二は見つともないので、急いで外へ出ようと思いましたら、土間の窪みに下駄がはいってあぶなく倒れそうになり、隣りの頑丈そうな大きな男にひど

くぶつつかりました。びつくりして見上げましたら、それは古い白縞しろじまの単物ひとえに、へんなみの簀すのようなものを着た、顔の骨ばつて赤い男で、向うも愕おどろいたように亮二を見おろしていました。その眼はまん円で煤すすけたような黄金きんいろでした。亮二が不思議がつてしげしげ見ていましたら、にわかにもその男が、眼をぱちぱちととして、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。亮二もついて行きました。その男は木戸口で、堅く握っていた大きな右手をひらいて、十銭の銀貨を出しました。亮二も同じような銀貨を木戸番にわたし外へ出ましたら、従兄いとこの達二に会いました。その男の広い肩はみんなの中に見えなくなつてしまいました。

達二はその見世物の看板を指さしながら、声をひそめて言いました。

「お前はこの見世物にはいつたのかい。こいつはね、空気獣だなんていつてるが、実はね、牛の胃袋に空気をつめたものだそうだよ。こんなものにはいるなんて、おまえはばかだな」

亮二がぼんやりそのおかしな形の空気獣の看板を見ているうちに、達二が又言いました。

「おいらは、まだおみこしさんを拝んでいないんだ。あした又会うぜ」そして片脚で、ぴよんぴよん跳ねて、人ごみの中にはいつてしまいました。

亮二も急いでそこをはなれました。その辺一ぱいにならんだ屋台の青い苹果りんごや葡萄ぶどうが、

アセチレンのあかりできらきら光っていました。

亮二は、アセチレンの火は青くてきれいだけれどもどうも大蛇だいじやのような悪い臭においがある、などと思いつながら、そこを通り抜けました。

向うの神楽殿かぐらでんには、ぼんやり五つばかりの提灯ちようちんがついて、これからおかがらのはじまるところらしく、てびらがねだけしずかに鳴っておりまして。（昌しょういち一もあのかぐらに出る）と亮二は思いつながら、しばらくぼんやりそこに立っていました。

そしたら向うのひのきの陰の暗い掛茶屋の方で、なにか大きな声がして、みんながそつちへ走って行きました。亮二も急いでかけて行って、みんなの横からのぞき込みました。するとさっきの大きな男が、髪をもじやもじやして、しきりに村の若い者にいじめられているのでした。額から汗を流してなんべんも頭を下げていました。

何か言おうとするのですが、どうもひどくどもってしまつて語ことばが出ないようすでした。てかてか髪をわけた村の若者が、みんなが見ているので、いよいよ勢いよくどなっていました。

「貴様きさまんみたいな、よそから来たものに馬鹿ばかにされて堪たまつか。早く銭を払え、銭を。ないのか、この野郎。ないなら何なして物食ものくつた。こら」



亮二はすっかりわかりました。

(ははあ、あんまり腹がすいて、それにさつき空気獣で十銭払ったので、あともう銭のないのも忘れて、団子を食ってしまったのだな。泣いている。悪い人でない。かえって正直な人なんだ。よし、僕が助けてやろう)

亮二はこっそりがま口から、ただ一枚残った白銅を出して、それを堅く握って、知らないふりをしてみんなを押しわけて、その男のそばまで行きました。男は首を垂れ、手をきちんと膝<sup>ひざ</sup>まで下げて、一生けん命口の中で何かもとにやもにや言っていました。

亮二はしゃがんで、その男の草履をはいた大きな足の上に、だまって白銅を置きました。すると男はびっくりした様子で、じつと亮二の顔を見下していました。が、やがていきなり屈<sup>かが</sup>んでそれを取るやいなや、主人の前の台にぱちつと置いて、大きな声で叫びました。

「そら、銭を出すぞ。これで許してくれる。薪を百把あとで返すぞ。粟<sup>くり</sup>を八斗あとで返すぞ」言うが早いか、いきなり若者やみんなをつき退<sup>の</sup>けて、風のように外へ遁<sup>に</sup>げ出してしまいました。

「山男だ、山男だ」みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしましたが、もうどこへ行つたか、影もかたちも見えませんでした。

風がごうごうつと吹き出し、まつくろなひのきがゆれ、掛茶屋のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。

かぐらの笛がそのときはじまりました。けれども亮二はもうそつちへは行かないで、ひとり田圃たんぼの中のほの白い路みちを、急いで家の方へ帰りました。早くお爺じいさんに山男の話を聞かせたかったのです。ぼんやりしたすばるの星がもうよほど高くのぼっていました。

家に帰って、厩うまやの前から入って行きますと、お爺さんはたった一人、いろりに火を焚たいて枝豆をゆでていましたので、亮二は急いでその向う側に座って、さっきのことをみんな話しました。お爺さんははじめはだまって亮二の顔を見ながら聞いていましたが、おしまいうとうとう笑い出してしまいました。

「ははあ、そいつは山男だ。山男というものは、ごく正直なもんだ。おれも霧のふかい時、度々山で遭ったことがある。しかし山男が祭を見に来たことは今度はじめてだろう。はっはっは。いや、いままでも来ていても見附からなかったのかな」

「おじいさん、山男は山で何をしているのだろう」

「そうさ、木の枝で狐きつねわなをこさえたりしてるそうさ。こういう太い木を一本、ずうつと曲げて、それをもう一本の枝でやつと押えておいて、その先へ魚などぶら下げて、狐だの

熊だの取りに来ると、枝にあたつてばちんとはねかえつて殺すようにしかけたりしている  
 そうだ」

その時、表の方で、どしんがらがらつという大きな音がして、家は地震の時のようにゆれました。亮二は思わずお爺さんにすがりつきました。お爺さんも少し顔色を変えて、急いでランプを持って外に出ました。

亮二もついて行きました。ランプは風のためにすぐに消えてしまいました。

その代り、東の黒い山から大きな十八日の月が静かに登つて来たのです。

見ると家の前の広場には、太い薪が山のように投げ出されてありました。太い根や枝までついた、ぼりぼりに折られた太い薪でした。お爺さんはしばらく呆れたように、それにながめていましたが、俄かに手を叩いて笑いました。

「はっはっは、山男が薪をお前に持つて来てくれたのだ。俺はまたさっきの団子屋にやるということだろうと思つていた。山男もずいぶん賢いもんだな」

亮二は薪をよく見ようとして、一足そつちへ進みましたが、忽ち何かに滑つてころびました。見るとそこらいちめん、きらきらきらする栗の実でした。亮二は起きあがって叫びました。

「おじいさん、山男は栗も持って来たよ」

お爺<sup>じい</sup>さんもびつくりして言いました。

「栗まで持つて来たのか。こんなに貰<sup>もら</sup>うわけにはいかない。今度何か山へ持つて行って置いて来よう。一番着物がよかろうな」

亮二はなんだか、山男がかあいそうで泣きたいようなへんな気もちになりました。

「おじいさん、山男はあんまり正直でかあいそうだ。僕何かいいものをやりたいな」

「うん、今度夜具を一枚持つて行ってやろう。山男は夜具を綿入の代りに着るかも知れない。それから団子も持つて行こう」

亮二は叫びました。

「着物と団子だけじゃつまらない。もつともつといいものをやりたいな。山男が嬉<sup>うれ</sup>しがって泣いてぐるぐるはねまわって、それからからだだが天に飛んでしまうくらいいいものをやりたいなあ」

おじいさんは消えたランプを取りあげて、

「うん、そういういいものあればなあ。さあ、うちへ入って豆をたべろ。そのうちに、おとうさんも隣りから帰るから」と言いながら、家の中にはいりました。

亮二はだまって青い斜めなお月さまをながめました。  
風が山の方で、ごうつと鳴っております。



# 青空文庫情報

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店

1988（昭和63）年12月10日初版発行

1990（平成2）年10月20日8版発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 祭の晩

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>